

辰巳商会
100年のあゆみ



T A T S U M I
S H O K A I

100 years
of our history

辰巳商会
100年のあゆみ

辰巳商会100年のあゆみ

目次

辰巳商会100年のあゆみ

100周年を迎えて

代表取締役会長 溝江 輝美	4
代表取締役社長 西 豊樹	8

第1部 創業

同志 4 人の決断 辰巳商会ここに始まる	12
----------------------	----

第2部 挑み続けた100年

第1章 港湾運送事業

顧客の信頼を得て躍進	20
戦後の再出発	22
はしけ不要、荷揚げに革命	24
南港コンテナターミナル C-4 の始動	26
エバーグリーンを誘致	28
外航船社・フェリーが続々と南港へ	30
中国・韓国などの船社 南港へ就航相次ぐ	32
【解説】港湾運送の仕事	34
大阪港夢洲にエバーグリーンターミナルが開業	36
OOCLのアジア航路船を南港 C-4 へ誘致	37
夢洲コンテナターミナル誕生	38
大阪港開港150年	40

COLUMN 1 追想 先駆者たち	41
四宮 忠蔵 顧客への温かな想い	

第2章 内航海運業

大日本人造肥料から輸送業務を次々と	44
硫酸の計画輸送を開始	46
三菱鉱業直島製錬所 本格的な硫酸輸送	48
三井金属鉱業の亜鉛地金を輸送	50
東邦亜鉛の鉱石輸送	51
【解説】船上のスペシャリスト、貨物船の内部紹介	52
初めて鋼船を導入	54
三菱セメントの海上輸送	55
当社最大タンカー カセイソーダ船建造	56
香川県豊島の汚染土、溶融スラグの海上輸送	58
三井金属鉱業の資源リサイクル事業に対応	59
アミタの海上輸送を一括管理	
2020年まで3年間に内航船16隻を建造	60

COLUMN 2 追想 先駆者たち	61
岡本 義雄 仕事に厳格 創業期の黒柱	

第3章 倉庫業

大阪 三突、福崎 倉庫を建設	64
安治川内港に進出	66
堺に臨海倉庫	68
大阪・木津川に倉庫	
神戸で業務を拡大	69
大阪・桜島作業所に危険物倉庫	70
大阪南港ライナーターミナル	71
辰巳商会の営業倉庫	72
【解説】いろいろな営業倉庫	
横浜に拠点を開設	73
岡山で業務拡充	74
九州・四国に進出	

COLUMN 3 追想 先駆者たち	75
太田 誠三郎 「英知と勇気で まっしぐらに進め」	

第4章 貨物自動車運送事業

初荷は荒川林産化学工業のサイズバイン	78
セメントのタンクローリー輸送	80
カセイソーダのタンクローリー輸送	81
地金のトラック輸送	82
硫酸のリサイクル輸送	
海上コンテナ輸送	83
ローリー輸送の多様化	84
岡山、大分で大同酸素の高圧ガス輸送	85
全車両に鳥の名前とイラスト	86
高圧ガス優良製造所として経済産業大臣表彰を受ける	

COLUMN 4 追想 先駆者たち	87
藤堂 幾蔵 熱意と行動力で目的完遂	

第5章 ケミカルターミナル事業

大阪・梅町に海陸一貫輸送の中継拠点	90
大阪・福崎作業所	92
臨海部に次々、大型タンク	94
堺、大分、敦賀にも拠点 広がるタンクビジネス	96
名古屋ケミカルターミナル開設	98
ティー・エム・ターミナル設立	100
神戸と千葉・市原に事業所	
中国・東南アジアでケミカルターミナル開設	102

COLUMN 5 追想 先駆者たち	105
高森 昭 「よし、やれ」即断、即決の人	

第6章 航空貨物輸送事業

国際複合輸送を強化	108
ヤンマーディーゼル製船舶用部品の輸出業務	110
繊維商社・瀧定の欧州向け航空貨物の事務手続き	
クラスカン ジャパンとの取引	111
第二種貨物利用運送事業(航空貨物)が許可	
米同時多発テロで貨物保安強化	
ゴンドランドジャパンの通関業務	
主要国際空港に拠点開設	112
【解説】国境越える航空貨物、輸出入の流れ	113

第7章 プラント輸送事業

世界を舞台に巨大機材輸送	116
インドネシアで資機材輸送	117
ロシアで2事業 国際複合輸送	118
イランで4プロジェクト	119
日揮から受注続く 輸送規模も拡大	120
原発事故に緊急対応	121
ベトナムの国家プロジェクトに参加	122
ケニアの地熱発電	
アルジェリアの原油集積・処理設備	123

COLUMN 6	124
創業者 四宮忠蔵 社会への貢献	
海の子学園の設立	
四宮育英奨学会の発足	125
みなと寮の設立	

第8章 海外進出

Tatsumi Intermodal (U.S.A.) Inc.(米国)	128
Tatsumi Shokai (Thailand) Co., Ltd.(タイ)	130
Tatsumi Logistics (Thailand) Co., Ltd.(タイ)	
Tatsumi Shokai(M)Sdn. Bhd.(マレーシア)	131
Tatsumi Marine(S)Pte.(シンガポール)	
PT. Tatsumi Seruni Indonesia(インドネシア)	132
PT. Cipta Segara Internasional(インドネシア)	
PT. Cipta Samudera Shipping Line(インドネシア)	
辰巳商会上海事務所「上海代表処」(中国)	133
Ningbo Chenling Liquid Chemicals Terminal Co., Ltd.(中国)	
(寧波辰菱液体化工倉儲有限公司)	
Tatsumi Shokai (Cambodia) Co., Ltd.(カンボジア)	

Tatsumi Vietnam Co., Ltd.(ベトナム)	134
Thi Vai International Port Co., Ltd.(ベトナム)	
Tatsumi Shokai (Panama) S.A.(パナマ)	135
Tatsumi Europe B.V.(オランダ)	
Tatsumi New Zealand Limited(ニュージーランド)	136
ケミカルターミナル事業の海外グループ会社	

COLUMN 7 社外顧問	
鉱業界を中心とした有識者に指導を仰ぐ	137

第3部 創業100周年

第4部 辰巳商会いま・むかし

本社事務所	144
車両	146
第一辰巳丸	147
制服・作業服	148

資料編

国内事業所	150
関連会社・関係会社	152
組織図	154
営業収入・経常利益等の推移	156
編集を終えて	158
主要参考文献	159

100年は通過点 若い力で次代を拓け

当社は2020(令和2)年9月28日、創業100周年を迎えることができた。これまでの軌跡を振り返り、所蔵する多数の写真で社史「辰巳商会100年のあゆみ」を編んだ。「100年は通過点。今後どのように事業を継承していくかが大切だ」と説く溝江輝美会長に、当社で歩んだ自身の半世紀と次代へのメッセージを語ってもらった。

代表取締役会長
溝江輝美

安全へ つなぐ思い

——会長が入社されて50年がたちました。創業100周年を迎えた感想をお話してください

1970(昭和45)年に入社し、半世紀にわたり辰巳商会とともに歩んできました。100年の節目を迎えられたことは、取引先の皆様はじめ、関係者のご支援、ご協力によるものです。ただし、100年は通過点です。今後、どのように事業を継続していくかが大切です。

当社の基本理念の第一は「安全はすべてに優先する」です。1971年から全社を挙げて安全対策に取り組み、役員や幹部がそろって年2回開催する「中央安全衛生会議」は2018(平成30)年に100回を数えました。

肌身で感じた荷役革命

——50年間で特に印象に残っている出来事は何でしょう

入社2年後に配属された安治川営業所(大阪市港区)の現場を懐かしく思い出します。当時の貨物は鋼材や電気製品、繊維、雑貨類で、はしけからの船積みが主流でした。安治川の岸壁には、在来船のインドネシア航路の東京船舶が接岸して、狭いエプロンながら活況でした。貨物は多種多様で荷姿もばらばら。船内荷役の扱いトン数の効率は非常に低く、1班で一日あたり700から800ト、届けば喜んだものです。

ちょうどコンテナを使った輸送へと切り替わる時期で、荷役革命を肌身で感じました。コンテナという箱に荷物を詰めたことで、1週間かかっていた本船荷役が数時間で済むようになりました。

最大の転機は南港進出

当社にとって最大の転機を挙げるなら、大阪南港進出でしょう。1974年にC-4を借り受けた当初は、なかなか船会社を誘致することができませんでした。新品のコンテナ置き場として使用してもらいましたが、広いヤードはガラガラで空き地のようでした。

新品コンテナの中に台湾のエバーグリーンのものがあり、1975年にエバーグリーンが引き取る際、当社が船に積み込んだのが最初の取引です。別の会社が元請港運事業者だったのですが、コンテナ岸壁を持っていなかったことから当社が請け負いました。

その後、エバーグリーンのコテナ船隊は急速に拡大し、当社が迅速に対応したことが評価されて、同社の元請港運事業者となりました。このことは、当社の港湾運送事業急拡大のきっかけになりました。

1996年には南港C-2で大阪商船三井船舶(現・商船三井)のグループ企業である商船港運とターミナル共同運営を開始して、C-1からC-4の全てのバースで運営を担うようになりました。当時は南港コンテナターミナルの所長を務めていて、コンテナ取扱量の拡大や荷役作業の効率化に力を注ぎました。

2002年にはエバーグリーンがコンテナ船の大型化に対応するため、夢洲C-11に進出してエバーグリーンターミナルをオープンしました。当社は同社からターミナル運営者として指名を受け、他社に先駆けて夢洲コンテナバースに進出することになりました。

物流の変化を注視

——新型コロナウイルス感染症は物流にどのような影響をもたらしましたか

当初は、生産拠点が中国からベトナムやタイに移行しましたが、感染は世界中に広がり、産業界のサプライチェーン(供給網)に大きな影響をもたらしました。

物の変化が物の流れにどのような影響をもたらすかについて、木材を例に説明しましょう。昔は原木で輸入され、いかだで住之江の貯木場に集められていました。周辺は製材業が盛んでした。やがて住宅建築に規格の決まった木材を使うツーバイフォー(2×4)工法が広まると、外国で製材したものを輸入するようになりました。製材は、無垢から強度や耐久性に優れた集成材になり、現場ですぐに組み立てられる加工材へと

変化していきました。

時代が流れ、今や貯木場にいかだはなく、住之江の製材業も数少なくなりました。

コロナをはじめ、さまざまな要因のサプライチェーンの変化を注視していきます。

海外拠点の強化と円滑な物流

——2009年から2019年の社長時代は、どのようなことに力を入れましたか

経済のグローバル化の急速な進展や東南アジアの経済成長に目を向け、マレーシアやインドネシア、シンガポール、タイなど海外の拠点を強化しました。成長著しいベトナムやカンボジアに進出しました。中でも2014年、ベトナム・ニソン経済区の製油所・石油化学コンプレックス建設に向けた資機材輸送は、同国の石油製品の安定供給につながる事業に貢献できたこととして印象に残っています。

若手を伸ばし、変化に対応

——西豊樹社長にバトンを託しました

かつては「10年ひと昔」と言われましたが、今や1年、2年がひと昔になっています。変化が激しい時代には若い力が必要です。若手を伸ばし、変化に対応する力を見いだしてもらいたいですね。

私は1973年10月から1年2カ月、マレーシアのマムート鉱山開発の駐在員として、当社からただ一人派遣されました。周囲にジャングルが広がるような所で、いろんな経験をさせてもらったのですが、入社3年半の若手によく任せてもらえたのだと思います。

南港外貿ターミナルに配属になった30代は、取り扱い貨物をなんとか増やしたいと、港湾の仕事をこなしながら鉄や木材の商社やメーカーを回る営業にも力を入れました。上司や先輩は「若くてもやれ」と背中を押してくれました。

会社の活力は若手の活躍にかかっています。私の経験でもありますが、若くても任せればやれます。上司は本質的なことや考え方を教えて見守り、若手の力を伸ばしてください。若手の力を生かして時代を切り拓いてもらいたいと思っています。



みぞえ・てるよし 1947(昭和22)年3月、長崎県生まれ。香川大学経済学部卒業後、1970年4月当社入社。港運事業所所長、取締役、常務を経て2009(平成21)年8月から社長。2019(令和元)年から現職。日本港運協会副会長、港湾労働安定協会会長、大阪港総合流通センター社長、夢洲コンテナターミナル社長も務める。2021(令和3)年7月、国土交通大臣表彰。同年8月、大阪港湾功労者表彰。



西 豊樹
代表取締役社長

「愛される会社」になろう。当社の創業100周年記念スローガンには「さらに、お客様と地域との絆を大切に」という願いが込められている。次の100年を見据え、これから私たちはどのように物流の仕事に臨んでいくべきなのだろう。西豊樹社長に聞いた。

次の100年を お客様とともに

愛される会社、 愛される一人一人に

——100 周年にあたって、これから私たちはどのようなことを大切にしていけるべきなのでしょう

お客様、地域との絆を大切に。それが当社の社風です。創業 100 周年の節目にこれまでを振り返り、創業者に始まる先人の功績に胸を打たれます。絆を大切に、信頼され、愛され続けてきた当社

を将来に受け継いでいくことが私たちの使命です。高品質だからこそ、愛される。この会社を 200 年、300 年と持続させなければなりません。

お客様からの信頼とは、簡単には得られないものです。信頼を得るためには、愛されなければなりません。愛される前にまず興味を持ってもらわなければいけません。そのためには、私たち一人一人が自分を磨いていくことです。仕事はもちろん、内面の人間性も含めてしっかりと研鑽^{けんさん}し、一人一人が愛され、そして愛される人が集まる集団になってはじめて

て、会社として社会貢献ができると考えています。

——スローガンは、お客様との絆の大切さを強調していますね

100年で、仕事のやり方も時代も大きく変わりましたが、変わらないものがあります。それはお客様を向いたマインド、情熱です。「辰巳と仕事がしたいと考えていただける強い関係性を築く」。スローガンに織り込んだ言葉は、脈々と受け継がれてきた社風、お客様との信頼関係の大切さをあらわしています。

2020(令和2)年春、新入社員に向けたあいさつで、薫陶を受けた先輩方のことを話しました。1975(昭和50)年の入社当時、私は立派だった案内パンフレットに引かれて、当社の門をたたきました(笑)。大阪の安治川営業所に配属されて、巨大な外航船に圧倒され、終夜、二晩続けて積み荷を揚げた倉庫へ。「こ

んな危険な仕事はいやだ」とすぐ逃げ出したくなりました。しかし、黙々と仕事する先輩の背中を見て、自分自身のマインドが変わったのです。当社の溝江輝美会長、深田サルベージ建設の社長、会長を務めた三崎幸三・同社相談役。素晴らしい先輩に恵まれました。

若い社員のアイデアに期待

——将来を担う社員に、今、どんなことを伝えたいですか

人生は「いいが、悪い」「悪いが、いい」の繰り返し。うまくいっているからといって浮かれず、悪くなった時を考えて動く。逆に、悪い時はいい時の前兆と考えれば精神的に押されてしまわず、前向きになれます。仕事や社会生活も同じです。

第四次産業革命といわれる変革の時代、当社は創

業100周年を迎えました。製造業、商社をはじめ当社のお客様の仕事も大きく変わってきていて、私たちも変わらざるを得ないことだけは確かです。今の仕事をきちんと見つめ、変化を恐れず立ち向かう姿勢がまず大切です。会社が継続するには、コーポレートガバナンスをしっかりと構築し、新しい時代に合った内部統制の形を整えなければなりません。そのうえで、新しい営業の柱を打ち立てる必要があります。若い社員の皆さんには未来に向けて新しい柱を何にするのか、どんどんアイデアを出してほしい。既に新規事業の芽は生まれています。

——どんな新規事業に期待を寄せているのですか

海外で農業ビジネスにチャレンジしています。「物流の辰巳商会が農業？」と多くの人が驚きます。

カンボジアでTatsumi Shokai (Cambodia) Co.,Ltd. が2020(令和2)年6月、自社所有のグリーンハウス農園で栽培した有機無農薬野菜やフルーツをオンライン販売し、各家庭に個別配達するサービスブランド「THE fresh」を立ち上げました。農産品の日本への輸出も目指しています。

ニュージーランドでは、2019年からイチゴ栽培に取り組んでいます。Tatsumi New Zealand Limitedが千葉県のベンチャー企業と組んで、生産から加工、流通、販売までを一貫して手掛けます。南半球は日本と季

節が逆で7月～11月にイチゴが生産でき、その時期に品薄な日本に輸出ができるのです。

運ぶことで価値を高め、未来を拓こう

——時代の変化の中で、私たちはどのように物流に取り組んでいく必要がありますか

物流はとても公共性が高い仕事です。お客様の財産を預かり、運ぶ仕事であって「これを運んで」とお客様から依頼を受けて、はじめて仕事が発生します。物流業はややもすると、「やらされている」感が強い業種と思われがちです。けれども、私は「こういうふうに運びませんか」といった提案をお客様にしていくことでもっと主体性を持てると思っています。

——「主体性を持つ」ためには、どのように考えていくべきなのでしょう

私は、物流とは物の価値を高める仕事だと思っています。江戸時代の紀伊国屋文左衛門^{※1}の逸話のように、物が無い所に物を運ぶことによって価値を高めるのが本来の物流なのです。運ばれるのでは

なく、運ぶことで物の価値を高めていく。仕事に追いかけるのではなく、こちらから追いかけて開拓していきましょう。

当社第2代社長、太田誠三郎の言葉を私は心に刻んでいます。

「徒手にして空拳、英知と勇気をただ一つの資本として、人の和を求め、幸せを求めて、まっしぐらに進んできた道に、断絶は許されぬと思うのは、私一人ではない」^{※2}

英知と勇気を持って仕事に取り組み、主体的な発想で未来を切り拓いていきましょう。



※1 紀伊国屋文左衛門 1669(寛文9)年～1734(享保19)年
江戸時代元禄期の商人。荒天が続いてミカンが不足していた江戸に豊作の和歌山から暴風雨の中、大量のミカン
を船で輸送。帰りには江戸から塩鮭を上方に運んで大もうけし、豪商になったと伝わる

※2 当社創業五十年史=1970(昭和45)年2月刊=序文の一節

にし・とよき 1954(昭和29)年
11月、佐賀県生まれ。広島商船高等専門学校卒業後、1975年12月
当社入社。倉庫部長、取締役、専務を経て2019(令和元)年8月
から現職。2021年5月からセントラル・コールド・ストレージ社長
を兼務。

第1部

創業

同志4人の決断 辰巳商会ここに始まる

1920(大正9)年、創業者・四宮忠蔵が同志と4人で大阪市西区(現・港区)の小さな貸事務所で辰巳商会を興した。7隻のはしけを借り受けて始めた運送取扱業から、顧客の信頼をつかんで事業を拡大。港湾運送で取扱量が増加し、内航海運事業では大手顧客を獲得して硫酸のタンク船輸送も開始。初期の基盤は固まっていた。

18歳で大阪の地へ

1893(明治26)年に高松で生まれた四宮忠蔵は数えの18歳で大阪に出て運送業、清水組に入った。清水組は上屋の荷さばきを担い、多くの仲間(作業員)を使っていた。倒産が相次ぐ大恐慌の時代の中で、清水組は大運組合合資会社(後の大運組)に改組。四宮は旧清水組の整理責任者として、債権、債務者との交渉に当たった。

整理が一段落した1920(大正9)年8月、四宮は大運組の代表社員に、部下に中元の祝儀を渡してねぎらってほしいと頼んだ。ところが、代表社員は耳を傾けず、別の仕事の指示を出したうえ、意見が合わないとみるや、「四宮のあっせんで入れた者は、全部連れて店を離れてもらいたい」と突き放してきた。四宮は苦悩と思案に明け暮れたが、債権、債務者との厳しい交渉の経験から、「誠意をもって団結すれば報いられる」との思いに至った。四宮を含めた同志4人で大運組からの独立を決断。辰巳商会を創業した。四宮28歳の時だった。

海陸貨物運輸業の始まり

創業の同志は、四宮忠蔵、岡本義雄ら4人だった。他に仲間(作業員)が3人。武田桴船部から、はしけ^{はしけ}*1 7隻を借りた。

大阪市西区北海岸通13番地(現・港区海岸通1丁目4)の住友倉庫所有の長屋の貸事務所(約60平方[㍔])を借り、1920(大正9)年9月28日に店を開いた。家賃は月5円。創業資金として300円^{*2}をかき集め、さらに知人の紹介で借り電話をすることにし、頭金の500円もかけずり回って工面した。

大運組では、日本郵船会社の輸入貨物の荷さばきを行う荷渡し側の業務だったが、辰巳商会では荷主の側に立つ運送取扱業を始めた。税関貨物取扱人の免許を受けなければ荷主代行はできなかった。必要となる供託保証金を調達できず、橋岡通関部に実情を訴え、橋岡の名義での通関業務を依頼した。貨物を保管するために、武内商店から60坪(約200平方[㍔])の倉庫1棟を月60円で借り受けた。

※1 はしけ:港内、運河で貨物の運搬に用いられた平底船
※2 大正末期の大卒サラリーマンの初任給(月給)は50~60円



創業の地、北海岸通周辺
大阪市パノラマ地図(大正12年)
=国際日本文化研究センター所蔵



創業当時の看板

創業当時の看板には「海陸貨物運輸業・辰巳商会」と記されている。縦45[㍎]、横60[㍎]のけやき作りで、中央には長方形の旗に赤い横線を2本引き、黒で四宮の「S」の字を入れた。

そのデザインは日本郵船会社の社旗に似ていることから、後に、社章は四宮忠蔵の頭文字を意味する「CS」を菱形で囲う図柄にした。1949年、CとSを丸形ゴシックにする、CとSの間に「.」を入れるなどの商標規格が決まった。

社名の由来

四宮が辰年生まれ、他の同志が巳年生まれだったことから「辰巳」とした。四宮は辰年生まれながら、旧暦と新暦の切り替えの時期に重なり戸籍上は巳年だった。「四宮運送店」とするのが簡単だったが、将来の発展を想定して個人の名前は避けた。「運送店」とするには十分な内容を備えていないことから使わず、「商店」では業態からかけ離れることから、「商会」を選び、「辰巳商会」とした。

税関貨物の免許取得

辰巳商会は創業の翌年1921(大正10)年に、税関貨物取扱人(現・通関業者)の免許と税関構内人夫営業者(現・指定保税地域の荷役業者)の免許を受けた。新規参入しようとする業者が、この二つの免許を得ることはかなり難しいことだった。その困難を乗り越えて、少しずつ取引先を開拓した。

「日中は机の前に座るべからず」と申し合わせて、昼間は得意先を回り、現場を走り、事務仕事は夕方以降に処理した。

庭先から庭先へ 取引先の信用を得る

小規模であっても、海上と陸上の輸送をつなぎ合わせて引き受け、庭先から庭先へと運送を企画した。創業当初の主な得意先と取り扱いの貨物は以下の通り。

〈通関事務のみ〉

輸出セメント(大阪窯業)、中国・青島からの輸入牛肉(萩原組)、満州からの引越し荷物(平山兄弟商会)、輸入木材(間口組)

〈荷さばき作業関連〉

馬糧のふすま(山安商店)、銅・真ちゅう(祭原商店、青木製銅所)、松やに(荒川商店)、粉乳のラクトーゲン(乾卯商店)、コーヒー(杉野屋)、牛皮・馬皮(祭原商店)、竹の皮(日新商会)、牛ろう(田中商店)



1925(大正14)年元日、恒例の住吉神社参拝(後列右から4人目が四宮忠蔵)。左端の人の法被に辰巳商会の「辰」の字が見える



大阪港の大栈橋に停泊する船舶
「大阪府写真帖」(大阪府1914年発行)=毎日新聞社提供

創業以来の取引先

創業当初から、格別ひいきにしてくれる荷主に恵まれてきた。荒川商店(現・荒川化学工業)は、100年間にわたって取引が続いている。四宮忠蔵が荒川正太郎氏の「偲び草」に寄稿した文章の一節を引用する。創業間もない時期に受けた恩顧に対する感謝の気持ちがにじみ出ている。

荒川商店の後身、荒川林産化学工業の初代社長荒川正太郎翁「偲び草」(1968〈昭和43〉年刊)に四宮忠蔵が寄せた追想文の一節

「私は大正9年、事情あって主家を離れ、同志数名と裸同様の姿で店を始めました。従来の主家は船会社側の専属業務に携わっていたのに対し、私の方は受け荷主側の立場で、荷主代行人として運送取扱業と税関貨物取扱人の仕事をするにいたしました。このとき肝心の荷主側で私を信用して下さるかどうかが、不安だったのです。そのとき、無条件で私を理解し、応援をして頂いた数名の方がございましたが、その一人こそ正太郎翁でした。あのときの感激はとうてい筆舌では尽くしきれません。荒川さんのお店は山安商店、日新商会、田中商店、祭原商店とともに私の終生忘れ得ぬものでございます。しかし、これらのお店も時代の変遷とともに姿を消され、いま残っておられるのは御社ただ一つとなりました。」



築港北海岸通倉庫群。北海岸通の住友倉庫が所有する長屋の貸事務所の一室で当社は創業した=住友倉庫提供